¡Hola, amigos!

第０９８号

（ＲとＮの Cádiz からの手紙）

皆さんこんにちは。これはＨＰというより、私達の近況をお知らせする長い手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は毎週、日本時間の金曜朝０４：００時から０８：００時の間に実施します。

臨時休刊の場合は、なるべくその前の週にお知らせするつもりです。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のものは順次削除します。

では、今週号へどうぞ。　　２００６年０３月０３日　カァディスにてＲ ｙ Ｎ

☆今週号のトップへジャンプ

現在有効なバック・ナンバーは０９７号（０２月２４日）、０９６号（０２月１７日）０９５号（０２月１０日）の三週分です。各週のトップにあるボタンからどうぞ。

＊今週号＊ No.098（2006年・第09週） ０３月０３日更新

「国境を見に・・・」の巻

電車・バス・渡し舟を乗り継いでポルトガルに行ってきました。国境のスペイン側の町はアヤモンテ Ayamonte、ポルトガル側はビラ・レアル・デ・サント・アントニオ Vila Real de Santo Antonio という長い名前です。どちらもあまり馴染みのある名前ではありませんね。旅行案内書なんかにも出てないと思います。両方とも国境の町という以外は別に特徴のある町ではありません。まず、地図を見てください。

これはスペインの南西の隅とポルトガルの最南部の一部です。 HUELVA と SEVILLA の綴りが二つずつ見えますが、青は県の、黒は市の名前。夫々が県庁所在地です。カァディスから直線距離ではわずか１２５キロほどですが、実際の行程はセビージャ経由でとんだ遠回りになります。海岸伝いに行ければもっと近いんですが、前にお話したドニャーナ国立公園を通り抜ける道路がないんです。今回の目的地は地図のほぼ中央に見える青の太線、ポルトガルとの国境です。

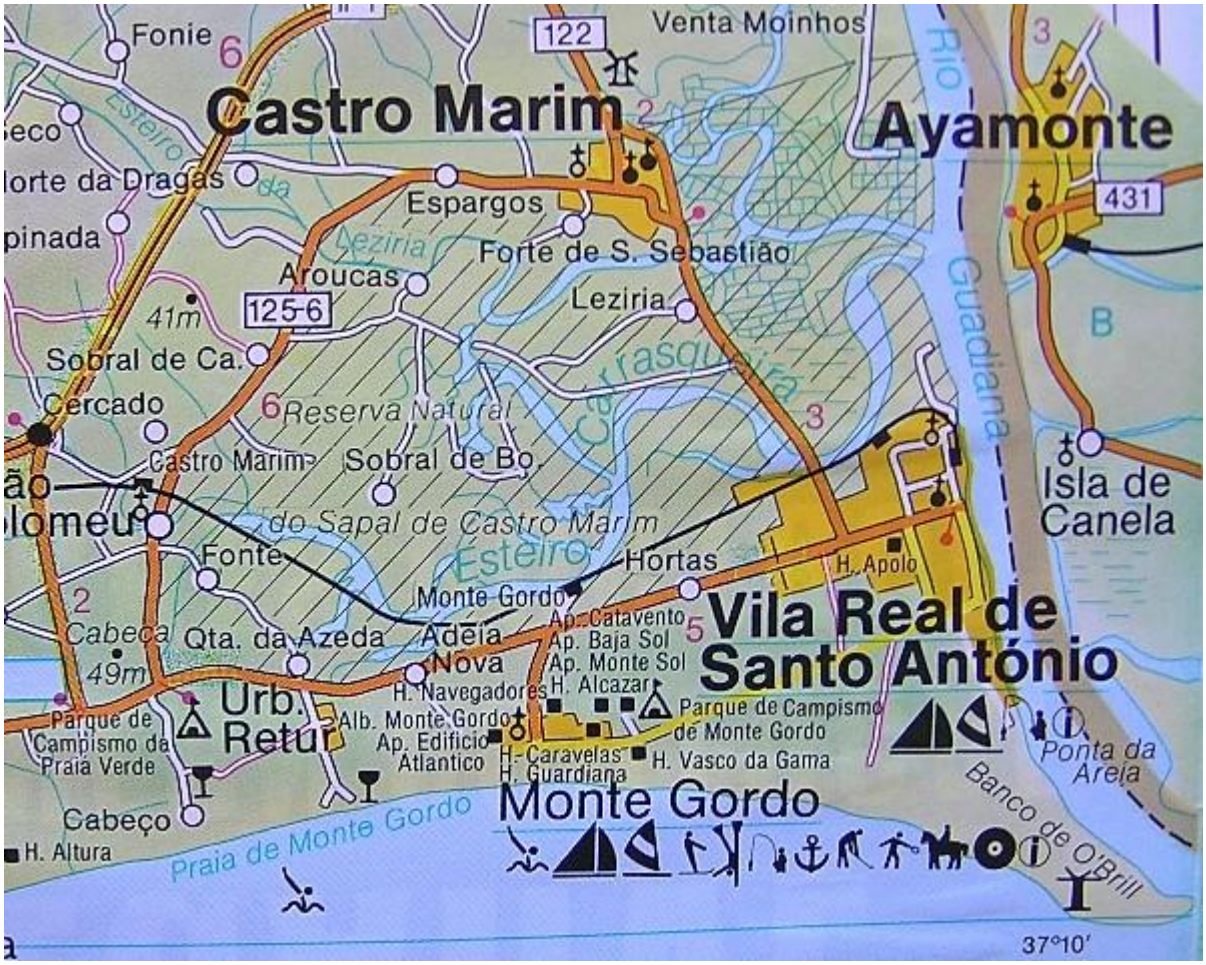
カァディス～セビージャ Sevilla 間は電車、セビージャからウエルバ Huelva はバス、ウエルバでバスを乗り継いでアヤモンテ、と大迂回をしなければなりません。しかも電車からバス、バスからバスへの乗り継ぎも決してすんなりとは行かずその間のロス・タイムは大変なものです。この辺がスペインを個人で旅行する場合の最大のネックです。私達がカァディスで電車に乗った時間は朝７時０２分、アヤモンテに着いたのは１３時３０分頃、所要時間は約６時間半ですが、実際バス電車に乗っていた時間の合計は約４時間、その差２時間半は乗下車地点間の移動時間と待ち時間です。

ま、急がず騒がず、そういう時間はセルベサかカフェでのんびりがスペイン風。

私達は最初アヤモンテに泊まるつもりでした。たまにはハリこんで四つ星パラドールとやらへ泊まってみようじゃないの、というわけ。ところがネット予約をしようとしたら満員、日付を色々替えてみたんですが２月中は全て満員でした。

このパラドールと言うのはスペイン独特の国営のホテルで、所によっては元宮殿とか貴族の館とか、お城とか、歴史的な建造物を改造したホテルもあって、国営ならではの貴重な宿泊体験を出来るので人気があるんですね。日本の旅行社でも「パラドールに泊まる旅」なんていう商品を売り出しているとこがあるようですね。

アヤモンテの建物自体は新しい物で特にどうと言うものではありません。パラドールのモウ一つのいい点は、６０歳以上の客が事前に予約をすると同伴者も含めて３５％の割引がある点です。例えばアヤモンテの場合通常９０ユーロのツインが５８．５ユーロになっちゃうんです。Ｎはパラドールへ泊まると意気込んでいましたが、ないものはしょうがない。色々ネットで検索した結果いいホテルが見つかりました。河向こうポルトガルの町に、２人でツイン２泊朝食付税込みで６０ユーロというのが見つかりました。ほんとカイナという安さ。とにかく、オッカナビックリ予約しました。



コレが国境周辺の地理。アヤモンテのすぐ西にリオ・ガディアーナ Rio Guadiana という河がありそれが国境になっています。予約したホテルは海岸の中ほどのモンテ・ゴルド Monte Gordo という所です。ここで出来る遊びが色々マークで示されてますね。正にリゾート。地図の斜線部分は自然保護区です。結局ホテルに着いたのは１６時少し前、スペイン時間では１７時前。この両国は１時間の時差があるんです。

ＥＵ圏で、同じイベリア半島で、しかもスペインの北西角ガリシア州とは全く同じ経度にあるんだから、時差もなくしてしまえば良いのに、と、よそ者は勝手に考えますが、この両国には色々と抜き差しならない因縁があって、そう簡単にはナカヨシにはなれないらしい。どちらかと言うとスペインは隣を軽く見る、お隣にはもうチョット屈折した感情があるような気がしますが、実際のところはどうなんでしょうか？

近くて遠い国、とはどこやらの国でもしきりに言われていることですね。

途中アヤモンテでの１時間の昼食休憩を含めて約１０時間、たかが２６０キロ足らずの距離ですから効率の悪い旅ですねー。今の日本じゃ考えられない。

私達がアヤモンテに着くのを待っていたかのように雨が降り始め、観光案内所をでた頃にはドシャ降りになってきました。ホウホウのテイでタパセリーア tapaseria＝タパス専門の手軽な食堂、に飛び込み５種類のタパス＋セルベサ＋ビィノの昼食を終えて出てきた頃にはもう雨も殆どやんでいました。

国境の河に出ると小さな箱のような切符売り場がありました。渡し舟の切符です。一人１．３ユーロ。ここでちょっと不思議な気がしたのは英語の表示が混じっていたことです。PORTUGAL POR FERRY の FERRY は英語を外来語として借用したとしても、小屋の横には完全な英語で TICKETS TO PORTUGAL としてあるしその上には TICKETS PARA PORTUGAL とスペイン語に英語交じりなのか、英語にスペイン語交じりなのか分からない表示です。普通のスペインの町なら billete＝切符、としてあるはず。やはり国境を意識して外国人に解る表示にしようと気をつかってるのかな？

アヤモンテの見物は帰る日にするとして、取りあえずはまず宿に行くことを優先にしました。何しろ値段が値段ですから、なんとなく心モトない。

フェリーの浮き桟橋付近から見たポルトガル。中央とその左手の二つの古城が見えますね。昔は簡単に河を渡って往き来するなんてことはなかったのかも知れません。それとも平時はナアナアでやっていてもイザ何かあったときは直ちにこの城が砲門を開いたのか？　まあ、ソコまで行かなくても牽制の意味でぜひここには城が必要だったのでしょう。今はお互いにＥＵ加盟国でパスポート・コントロールも何もなく、私達外国人も自由に往き来が出来ます。イミグレも税関も、警察官すらもいません。普通の隣町へ行くのと全く同じです。私達が始めてスペインに入国した時はシェンゲン協定に加入していないイギリス経由だったので、マラガ空港でパスポートに入国スタンプを押されました。けれども去年の一時帰国の折は往復とも協定加盟国のドイツ経由だったのでフランクフルト空港での出入国スタンプだけ。だから、スペインへ再入国したという証拠は書類上ありません。今回の旅行もパスポートの提示を求められたことは一度もなく、書類上でポルトガルと言う外国へ行ってきたという証拠は残っていません。通貨はユーロで共通だし、こういう点では外国へ行ってきた実感がありません。改めてＥＵは一つだと思いました。国どうしの国民感情は別として・・・。

待つほどもなく少し川下のポルトガル側の町ビラ・レアルからフェリーがやってきました。フェリーなんて言うと大型カーフェリーのイメージがわきますが、コレは又なんとかわいいフェリーです。やっぱり「渡し舟」と言いたくなる感じです。

渡し舟の上流に見える橋はリオ・ガディアーナをまたぐモウ一つの交通手段です。私達も片道はバスでこの橋を渡ってみたいと思っていましたが、時間の調整がつかず、やめました。この国境の河の景色を見たくてここにやってきたようなものですから、旅の目的はコレでほぼ満たされました。

当初セビージャからはアヤモンテ直行のバスに乗るつもりだったんですが鉄道駅からバス・ターミナルへの移動をもたついたのでタッチの差で乗り遅れてしまいました。仕方なくウエルバでの乗り継ぎとした為、少し町歩きの時間が出来ました。ウエルバの町そのものは殆ど魅力のない河川港の町です。この町にはアフリカからの出稼ぎの人々が異様なほど大勢いました。ウエルバ周辺はイチゴなど手摘みの農産物が多く、農業労働者を多数必要とするんですね。なかには違法労働者もいるに違いない。最近の異常に多い組織的な密航者も受け入れる組織があってこそのことでしょう。

通り雨が上がったところで渡しに乗り込みました。この通り小さな浮き桟橋。同乗者は徒歩の１０数人と乗用車１台、自転車２台。もぎりのオジさんも手持ち無沙汰。

さて、いよいよ出港。丘の上に見えるのが泊まり損ねたパラドール。２．５キロ下流のビラ・レアルまで所要時間約１０分、８ノット(時速１５キロ)以下の低速。

ポルトガル側の町、ビラ・レアル・サント・アントニオ。水上から見た町の景観は、はっきり言ってコッチのほうがはるかに良いですね。クルーザーの舫うマリーナと古色蒼然の白いホテルは絵になります。町の規模はアヤモンテのほうが上ですが、アッチはスペインの勝手口、コッチはポルトガルの玄関と言う感じです。国境の越え方も色々ありますが、渡し舟で、と言うのも変わった形の一つでしょう。これでも船での海外旅行！　豪華客船ではありませんけどね。上陸すると、スペイン側にはなかった西・英・仏・独語の歓迎看板。でもドイツ語は Ｌ とMがダブってなかったかナー？

ビラ・レアルの町で見つけたスペインにはないもの。上の建物。瓦はスペイン瓦と似ていますが、その色、建物の形、窓枠、等どこかスペインとは違います。郵便局もスペインは黄色、こちらは赤、マークも違います。薬局も緑から青に。下はフェリーの行き先表示、スペイン語の ESPAÑA がポルトガル語ではこうなります。所変われば、と言いますが、わずか１０分の舟旅でいろんなものが変わると不思議な気がします。

私達よそ者から見ると同じカトリック、同じロマンス語の国なのにね。

ビラ・レアルからバスは約１５分でモンテ・ゴルド着。コレが私達の泊まった三つ星ホテル・アルバ。２人２泊朝食付税込み６０ユーロの超格安ホテルです。バス停から３～４分と至極便利なところにありました。外見はナカナカ良いでしょう？

中は勿論豪華絢爛とはいきませんが、ツインベッドで部屋の広さも充分、設備も清潔度も申し分のないものでした。ここは正確には hotelapartamento オテル・アパルタメントと呼ばれるもので、リゾートに良くある長期滞在客を主にしたホテルです。

だから、部屋には炊事の設備もあるし、冷蔵庫も二人の一週間分ぐらいは楽に入る大きさのものが付いていて、調理器具や食器類や食卓も揃ってました。

リュックを放り出すと早速町の探検に出かけました。この町に着く前、渡し舟の中から感じていたこと、「歓迎」の看板を見、バスに乗って、益々その感じは強くなっていたんですが、この町は殆どドイツ人の町といっても良いくらい、道ですれ違う人もあちこちの店の中で見る客も圧倒的にドイツ人が多いんです。勿論、私達が泊まったこのホテルも泊り客は殆どドイツ人らしい。チェックインをする間もカウンターやロビーの周りではドイツ語が飛び交っていました。

前にヘレスの空港へ行った時も感じたんですが、コスタ・デル・ソルで完全にイギリス人に出遅れたドイツ人は、コスタ・デ・ラ・ルースは自分達が牛耳ろうとしているように感じられるのです。ヘレス空港の発着便は殆どがドイツ向けですからね。ここポルトガルの南岸もその延長で既にドイツに占領されてしまったんじゃないでしょうか？　この分ではポルトガル南岸唯一のファロ Faro の空港も発着便の大部分はドイツの空港行きになってるかも。　そのファロには明日行くことにして、今日はスーパーで調理済み食品とポルトガルのビィノを買って部屋でユックリ夕食とします。なにしろ町はドイツ人だらけ、食事をするところもどうせドイツ租界になってるだろうしね。また、気に入らんことに例の緑の瓦と赤提灯のＣレストランが町中あちこちに見えるんです。Ｄはたくましい、けれどＣは更にたくましい。

渡し舟を降りたところで見た「歓迎」の看板はアルガルベ Algarve というこの州の観光局が立てたもので、ドイツ語が最後になっていましたが、どうしてどうして私達がこの３日間の旅行中に見た外国人観光客といえば殆どがドイツ人でした。

海岸にあったカジノ。お堅いＤもリゾートでは博打ッ気が出るのかナ？＊＊＊

「もう一つの言葉」の巻

２月２３日から３月５日まで、カァディスはカルナバルに浮かれています。地方紙によると市内のホテルやペンションは全て満員らしい。

ところが、天候はイマイチで私達がポルトガルから帰るのを待っていてくれたように２３日から崩れ始め、２５・２６と週末は大荒れでした。コレじゃカルナバルも今ひとつ盛り上がりませんね。そういえば去年のこの時期もあまりいい天気ではなく、パレードも雨で中止になった日もあったようです。

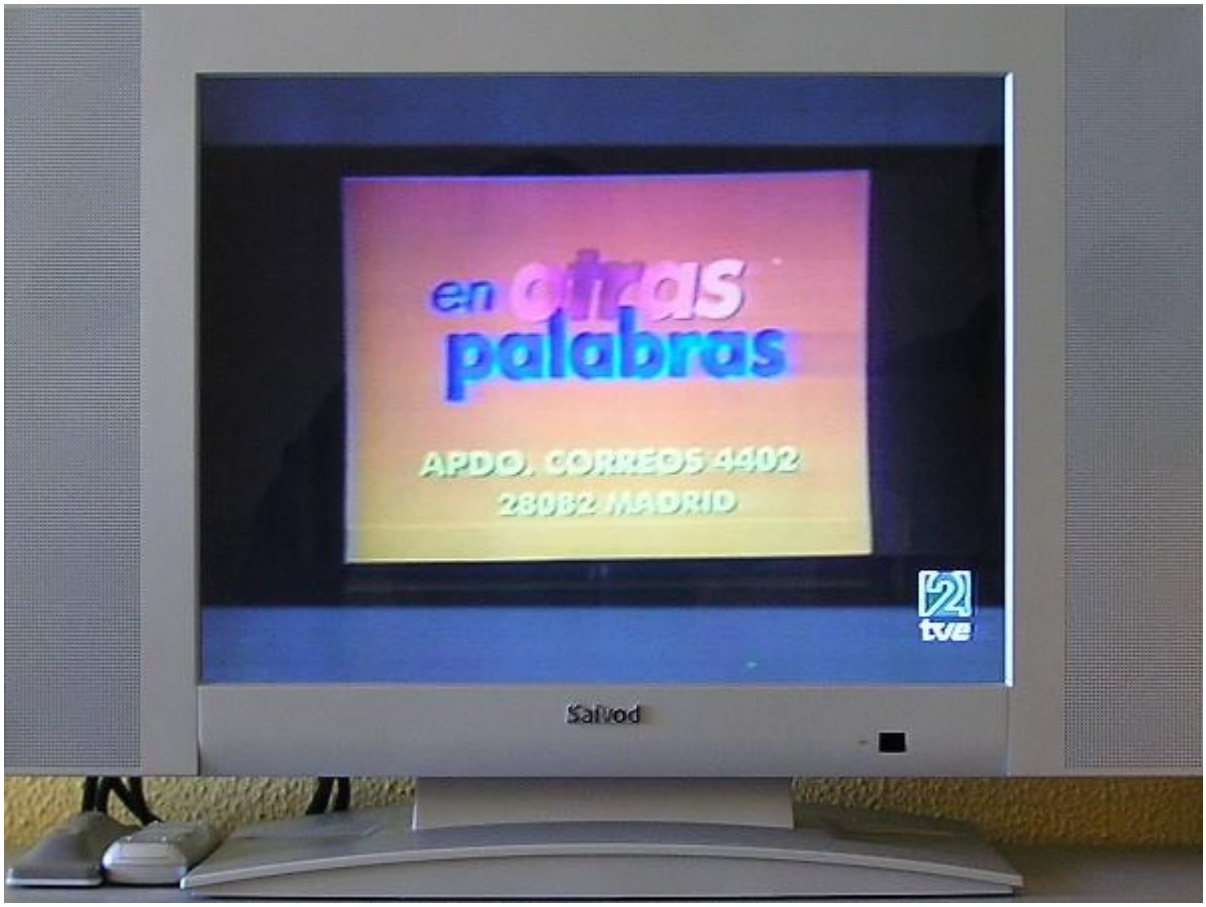
今年も雨にたたられて、しょぼいパレードだったらしい。Ｒはこういうものには全く興味がないので、Ｎ一人で雨の合間に出かけてゆきましたが、やっぱりパレードの途中で降られて帰ってきました。ゴクローサン。

カァディスのカルナバルはアンダルシィア州の中では良く知られているらしいのですがパレードそのものは大したものではありません。テレビで見るリオのカーニバルのようなスケールではなく、まあ、子供だましの域を出ません。コレならテネリフェのパレードのほうがよほどホンモノです。

カァディスのカルナバルは、どうやらパレードが主ではなく、Gran Teatro Falla グラン・テアトロ・ファーヤという旧市街にある古い劇場で連夜行われる風刺歌のコンテストが一番の呼び物らしいんです。

私達はテレビ・ニュースでしか見てませんが、何十と言うグループが夫々の創作の社会風刺の替え歌を唄うコンクールをするらしい。衣装も夫々の唄の内容に合わせたおそろいのモノを着ています。観客は大いに沸いていますが、スペイン語の分からないモノにはネコに小判、馬の耳に念仏。

サッカーを見たりフラメンコを聴いたり、食べたり呑んだりの楽しみは言葉が解ろうと解るまいと何の問題もありませんが、風刺の替え歌はいけません。ストレートな言葉でも単語の綴りを目で見ないとなかなかピンとこないのに、色々な社会現象をヒトヒネリもフタヒネリもした風刺のスペイン語がわかるわけはありません。



これは毎週土曜日の朝の私達のスペイン語の先生です。otras parabras とは「別の言葉」または「モウ一つの言葉」という意味で、手話ニュースのタイトルです。

私達にとってスペイン語のナニが難しいか？　何もかも難しいのですが中でも聞き取りが一番難渋するところです。日本語だって聞き取りにくくなってるのに・・・。

不規則動詞は勿論、規則変化ですらマスターできていないんですが、ソレは辞書や参考書に頼れば何とかなります。どうせすぐ忘れて、またモトの木阿弥ですけどね。

けれども、言っていることが、字で綴ればどういう単語になるのか解らないことにはどうにもなりません。手話ニュースのいい点は、言葉を聞きながら単語の綴りを見れること。スピードが速くてとても全部を読み取ることは出来ませんが、キー・ワードのいくつかが解れば、なんとなくそのニュースの全体像の見当をつけることが期待できます。私達には、どうしても目から入る情報が一番頼りになるんです。

スペインに来て最初に頭をひねってしまったのは、Estados Unidos エスタードス・ウニードス(合衆国)。このことは前にお話したと思いますが、これをエスタード・スニードスと聞いてしまったんです。ま、私達のヒアリングはそんなもの。

エスタードスとウニードスに聞き分けれたのは殆ど丸一年経ってからでした。それもこの手話ニュースを見ていて、アッ、これこれ、コレだったんだ、という具合。

丁度洋画の字幕のように画面の下に出た単語から、知らないモノを出来るだけ多く電子辞書で引く、そうするとニュースの内容がわかってくるものもあるんです。

実はマルタのスペイン語教室でもソレを期待したんですが、コレは全く当てが外れました。彼女もやはり紛うかたなきスペイン人。読み書きよりは断然オシャベリが好き且つ得意。彼女のオシャベリを牽制するためあらかじめこちらがスペイン語の小文を書いておいて、添削をして貰うという方法をとったんですが、やはりダメでした。

添削をするにしても、結局ペンを使うのではなく、専ら舌が回るだけ、気合が入ると思わず立ち上がって熱弁を振るうと言うことになってしまいます。そんなにペラペラやられたって私達がわかるわけないでしょう・・・。スペインでは、特に彼女の年代ではゴク少ないはずの大学教育を受けた女性にしてコレですからネー。

一人暮らしで、普段オシャベリの相手に恵まれていないせいもあるでしょうが、とにかくセキを切ったようにしゃべりまくります。

これは別の局の手話ニュース。こちらはテレ・シグノ（テレビのサイン）というタイトル。この２局が丁度連続する時間帯にやってくれます。更に別の局の「ニュースの焦点」みたいな番組も主な内容を下に字幕で出すので貴重なニュース・ソースです。普通のニュース番組だけではナンダナンダばっかりで、さっぱり真相が解らない時にこれらの番組を見て、ああ、そうだったのかということが結構多いのです。

最近欧州各地で鳥インフルエンザが蔓延しつつありますが、これを gripe aviar グリーペ・アビアールと言うこともこの番組で知りました。スペインではまだ発症例は報告されていないようですが、近隣諸国では野鳥が大分死んでいるようです。

ところで、今日のニュースでは、スペイン版ＮＴＴともいえる Telefonica テレフォニカという会社が今期４０％の増収で、コレは携帯電話の普及によるものだと言っていました。私達が見たところでもコレは全く納得のいくことで、スペインの人達のオシャベリ好きと携帯電話はピッタリ・マッチです。電車でもバスでも携帯の電源を切るなんて思いもよらぬことだし、誰も納得しないでしょう。だいいち車内の携帯がどうのこうの言う以前に、車内のオシャベリ騒音はそれ以上ですからね。＊＊＊